巻頭言

研究を北の大地に移して早一年が過ぎた．世界の友は本当ですか，どうしてですか，大変でしょうと気遣ってくれた．ありがたいことである．巻頭言には少しそぐわないかもしれないがこの経験について雑感を綴りたい．

私にとって十年に一度，会社（国立大学も法人化したのだからこの表現でかまわないだろう）を替えることは良いことである．気分がリフレッシュする．原野を開拓し，新しい家を建てるのはワクワクする．新鮮で愉快だ．開墾地に種をまき，狩をする．新しい友ができるのも素敵だ．しかし，これが五年にではいけない．調度は未完成で整わないし，果樹もおいしい実がつくまで育たない．とにかく何事も成熟しない．おそらく，二十年にでもいけないのだろう．成熟し住み慣れると無精者には居心地が良すぎる．一回目の転社は，先輩たちに後押しされた．そして，無精者の私に新しい感性を教示した．それゆえ，二回目の今回は大いに自発的だった．確かに今回も強く誘ってくれた人はおり，それがきっかけだったのだが．しかしながら，今回はよく私を引き受けてくれたものだと正直思う．学生たちと10トンを超える調度も一緒にだったのだから．関係者各位のお世話とご好意に感謝してしすぎることはない．学生たちもよく納得してくれたものである．こちらにも感謝．

ところで，研究上だけでなく教育上も研究者の転社は有益だと思う．学生たちはそれぞれ，成熟に向かう活気ある創造段階を必ず体験できる．私の学生時代も運が良かった．最も幸運なのは転社時にめぐり合った学生であることは言うまでもない．しかるに，なんと日本の大学社会は転社することに，とりわけ，学生の流動にとって不利益な構造になっているのだろうか．断じて言う，日本における研究者・学生の流動化推奨は風説の流布にすぎない．饅頭怖いは落語と証券の世界のみならず．にもかかわらず，私は転社を推奨する．大志を抱く者に，そして，抱く時に．

圦本　尚義　（北海道大学　理学研究院　自然史科学）